

英語の語源を訪ねて

——動詞編——

福原英子

1. インド・ヨーロッパ語族

「東はインド・イランから西はブリテン島、北はスカンジナビア半島から南はイタリア・ギリシャに至るアジア・ヨーロッパの広範囲に渡る地域で話されている言語に共通の祖語があった」との仮説が言語学者の間で認められている。その民族発生の時期と場所については諸説があり確定はできないが、氷河期を終えた今から約 5000 年～7000 年前にコーカサス地方の周辺（カスピ海・黒海の北方 現在のウクライナ地方か、現在のトルコがあるアナトリア地方）に住んでいた農耕や遊牧を営む民族であったらうとの推測が有力である。そこから発生したそれぞれの移動集団が定住した場所で文化圏を形成し、それぞれの地域で使用されるようになった言語は以下（p.232 図式）の諸派に分かれて行った。中には死滅した言語もあるが、その多くは現代語に繋がっている。

現在でも使用されているインド・ヨーロッパ語族の各言語母語話者の総数は 25 億人を超えと言われており、公用語として使用している話者の人口を加えると、世界人口 68 億（2009 年推計人口）の 1/3～1/2 に達する可能性がある。その言語には国際連合で公用語として使用されている 6 言語（常任理事国の 4 言語－英語、フランス語、中国語、ロシア語、とその他世界で広く用いられている言語としての 2 言語－スペイン語とアラビア語）中 4 言語が含まれている。

「インド・ヨーロッパ語族」説が最初に提唱されたのは 18 世紀で、その発端は、イギリス人法律学者 Sir William Jones がインド駐留中にインドの古典サンスクリット語に出会ったことに始まる。彼は、インドの古い法律書を研究中に、サンスクリット語と古典ギリシャ語や古典ラテン語には共通性があることを発見し当時の学会に発表することになった。ギリシャ語、ラテン語以外に、ペルシャ語、アラビア語、ヘブライ語や中国文字にも幼少期から親しんだ言語の神童であった William は、その三言語は更にゴシック語（ゴート語）、ケルト語、ペルシャ語とも関連があることを指摘する¹⁾。

インド語派	ヴェーダ語 → 古典サンスクリット
	プラトリート語 ~ 現代インド語 (ヒンディー語、ベンガル語~)
イラン語派	アヴェスタ語/古ペルシヤ語 ~ 現代ペルシヤ語
アルメニア語派	古典アルメニア語 ~ 現代アルメニア語
ギリシヤ語派	ミュケーナイ・ギリシヤ語 / 古典ギリシヤ語~現代ギリシヤ語
アルバニア語派	(イリュエリア語派) ~ 現代アルバニア語
イタリア語派	オスク・ウンブリア語群
	ラテン語群 - 古典ラテン語 - 俗語ラテン語 → ロマンズ語群 (ルーマニア語、イタリア語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語、カタロニア語)
ケルト語派	大陸ケルト語群 - ゴール (ガリア) 語
	ブリタニック語群 - 現代ウエールズ語、ブルトン語、他
	ゲールック語群 - 現代アイルランド語、ゲールック語、マンクス語
バルト・スラブ語派	バルト語 - 古プロシヤ語~現代リトアニア語、ラトヴィア語
	スラブ語 - 西スラブ語 ~ 現代ロシア語 - 東スラブ語 ~ スロヴァキア語、ポーランド語、チェコ語 - 南スラブ語 (古プロシヤ語) ~ ブルガリア語
ゲルマン語派	東ゲルマン語 - ゴート語
	北ゲルマン語 - 東スカンジナビア~スエーデン語、デンマーク語 - 西スカンジナビア~ノルウエー語、アイスランド語
	西ゲルマン語 - 高地ゲルマン語 ~ ドイツ語、オーストリア語 - 低地ゲルマン語~〈現代英語、オランダ語、他〉
その他	アルメニア語派、トカラ語派、アナトリア語派 (古ヒッタイト語)

この図式に従い、英語はインド・ヨーロッパ語族のケルト語派が紀元前に、そしてゲルマン語派が紀元後に現在のイギリス、ブリテン島に移住したことで形成されていく。

2. 英語の歴史〈異民族の侵入と言語の伝播〉

1) ゲルマン民族の侵入

紀元前 2000 年頃より、最初にヨーロッパ大陸からブリテン島に移動してきたのはインド・ヨーロッパ語族の中のケルト民族であった。タキツスの「ゲリア戦記」にも記されているように大陸のケルト民族を平定したシーザーは BC 55-56 年にブリテン島の占領も企てるが、実際にブリテン島を征服してローマ帝国の属州にしたのは AD 43 年クラウディス帝の時代であった。

その後紀元 5 世紀に入り、大陸の都ローマ自体がゲルマン民族 (ゴート族) の侵入の脅威に晒されるようになり、ローマ軍はその防備のためにブリテン島の軍隊を引き上げて行く。その期に乗じてゲルマン民族のサクソン部族が大陸から北海を越えて AD 449 年にケント州に上陸する。サクソン部族に引き続き、現在のドイツ・デンマーク・オランダの地域にいたアングル

部族・ジュート部族も移動してブリテン島を乗っ取ってしまう。後にラテン語の年代記で書かれた数少ない文献の記録によると、事實は、無防備となったブリテン島をスカンジナビア半島からのバイキング侵入やアイルランドの Scots や Picts の攻撃から守るためにケルト王が招聘した異民族の軍事力にケルト民族が対抗できずに領地を奪われ、自分たちが北方や西方の僻地に追いやられることになったようだ。結果として、ゲルマンの各部族が定着した地域に七つの王国 (Kent, Essex, Sussex, Wessex, East Anglia, Mercia, and Northumbria) が建設され、ゲルマン人の話す言葉を土台とした古代英語が誕生する。

2) キリスト教への改宗

ゲルマン民族がブリテン島に移動する約 100 年前 AD 313 年に、東ローマ帝国のコンスタンチン帝はキリスト教を国教と定め、その決定はローマ帝国の属州にも公布されていたのでキリスト教の影響はブリテン島のケルト人の間でも始まっていた。その後ゲルマン人によるブリテン島の征服が完了した 6 世紀の終わり頃からブリテン島をキリスト教に改宗させる活発な宣教活動が再開する。

AD 597 年にローマ法王 Gregory I は St. Augustine 率いる宣教団を南部地域に派遣する。アングル族の王国の中で当時最も文明化され、ヨーロッパ大陸のキリスト教国フランスとの繋りも緊密であったケント王国に上陸した St. Augustine は比較的幸運であった。宣教団は当初の小競り合いの後に Ethelbert 王に懇ろに受け入れられ、個人的に心積もりのあった Ethelbert 王の改宗にほどなく成功する。こうして宣教団の活動がアングル族 (Angles) を angels (天使) に変えたとされている。Ethelbert 王の改宗から 4 年後の 601 年に Augustine は最初のカンタベリー大司教となり、その地に司教区を得る。イギリスにキリスト教会が建立され、この場所が後にラテン語・ギリシャ語を学ぶ学問の中心地となる。

一方、北部の宣教地でも 7 世紀にはキリスト教信仰は急速に広がる。ウエールズ生まれの St. Patrick が 5 世紀にアイルランドを改宗させた時に布石したキリスト教の伝統が西スコットランドに受け継がれ、そこから 635 年に St. Aiden がイングランド北部の宣教地 Lindisfarne に派遣される。アイルランド系宣教団がその地に創設した修道院を核として行った積極的な布教活動が Northumbria・Essex・Mercia 王国で結実し、Northumbria 王国の Edwin 王もキリスト教に改宗にする。8 世紀に当時ヨーロッパで最も優れた学者の一人として知られていた Bede 自身が建てた Jarrow 修道院を中心として行った広範な学術活動 (文学・芸術・歴史書・神学など) は Northumbria 文明の黄金時代をもたらしたといわれている。

アングロ・サクソン文化史の中で最も大きな出来事でもあったと言われているイングランドのキリスト教化はこのような南北両側からの宣教活動によって実現し、7 世紀終わりまでにイ

ギリスはキリスト教圏の重要なメンバー国となる。

林立する王国の中で最初ケント王国が文化・経済の両面で主要地となる。7～8世紀にはその優位性は一時北部のノーサンブリア王国に、その後 Mercia 王国に移り、AD 825年には Egbert を始めとする卓越した王を擁立する南部の Wessex 王国が覇権を握る。Wessex の2代目 Alfred 大王（880–925）の時代にアングロ・サクソン文明は第2期黄金時代を迎え、年代記（The Anglo-Saxon Chronicle）の編纂を初めとする自国語（アングロ・サクソン語）による文明再建活動が進められる。Alfred 大王自身の学問への奨励のお陰で Wessex の都 Winchester は文化の中心地としてイングランド全土の首都となり、一般に古代英語と呼ばれているのはこの地域で話されていた West Saxon 語のことを言う。Mercia の言葉が標準語となり、商業都市として台頭してきていた London が文化的・政治的重要性をもつようになるのはもっと先のことである。

3) Viking の襲来と Dane Law

北ゲルマン語を話すスエーデン人は常に通商活動と海賊行為を通して交易航路を獲得していたが、スカンジナビア半島を拠点とするスエーデン人とノルウェー人、及びデンマークのデーン人は9世紀からの200年間に東西の遠方ルートと近接ルートの3方向に分かれて当時の世界各地を迂回して略奪行為を行った。東方ルートはスエーデン人がヴォルガ河を越えてスラブ地域やコンスタンチノーブルから地中海を回りシシリー島へと向かい、西方ルートではノルウェー人がアイスランドやグリーンランドを超えて北アメリカ大陸に向かう。そして内陸西方ルートにはデーン人が北海をイベリア半島まで南下してアフリカ大陸北岸のアラブ地域やイタリアに向かった。このような広範な地域に跨る猛烈な集団的襲撃・略奪行為が Viking と呼ばれていた。アングロ・サクソン王国が支配するイングランドでは、8世紀後半からの100年（787–880）と Wessex の Alfred 大王の死後100年（925–1016）の2度に亘って Viking の襲撃を受ける。

1度目（787–880）の襲撃では Northumbria の教会や修道院を含めるイングランド北東部が略奪の被害を受け、East Anglia は Viking の占領下となり、更に南部の Wessex にまで攻撃が及ぶ。Ethelred 王と Alfred 王は苦戦を強いられるが、878年 Edington での勝利を機に886年にデーン人 Guthrum 王と東西分割統治の調停案 Dane Law を結んで Wessex 王国を守る。和平の取り決めに従い Wessex を去ったデーン人 Guthrum 王自身がキリスト教に改宗し、以後デーン人は北のチェスターから南の London に至る北東部を居住地域として統括する。

Alfred 大王の死後、2度目の襲撃（925–1016）が後のノルウェー王とデンマーク王の連軍による進撃から始まり、その時のイングランドは Viking 攻撃に抗し切れず屈服する。イングラ

ンド王 Ethelred と Edmund は引き続き死去し、その死後 20 年間(1016–1036)はデーン王 Canute がイングランド王を兼ねて北海を挟む両国を統治することになる。しかし、征服者 Canute はサクソン人をデーン人と対等に扱い、アングロ・サクソン文化の修復にも努める名君であったと言われている。

アングロ・サクソン文明の中心地であった Wessex 王国は、Ethelred の息子 Edward the Confessor が 1042 年に王座に着くまで異国の王の支配下に入ることになる。一方イングランドに定住したデーン人は南西部の先住民に抵抗感なく同化し、ゲルマンの両部族は穏やかに共生する。デーン人もサクソン人も元来言語体系の似通ったゲルマン語を話す同一語派に所属する部族であったということが、大きな要因とみなされている。

古代英語時代(AD 450–1066)からの言葉として推定される英語の語彙数は 20,000 から 30,000 と言われている。その語源はインド・ヨーロッパ語族の時代から保持してきたと推測できる基本語 (moon, tree, brother, mother, do, be, new, long, that, me, mine, two など)、ゲルマン民族共通の日常生活、自然環境や自然現象に関わる言葉 (sand, earth, starve, make, find など)、部族独自の言葉 (boat, house, wife, drink, sail, rain, winter など)、そしてイギリス定住後に付け加えた言葉 (bird, woman, lady, lord など) 一般的に同質的な Anglo-Saxon 語であった。

4) ノルマンの征服－アングロ・サクソン時代の終焉と中世英語の始まり

短命であった Canute が 60 歳台まで生きておれば北海を中心とする一大帝国が建設されていたであろうとの推測もあるが、Canute 後のデーン人後継者は両国を統括する能力に欠け、Canute の死 (1036 年) 後ほどなくイングランドは以前のサクソン系の王制に復帰する。王位に着いた Edward the Confessor は Canute 統治中には母親の里ノルマンディで長期間亡命生活を送っており、亡命先で僧侶の生活に深い影響を受けた Edward は即位後も子息も残さず、その死後イングランドは王位継承問題で混乱する。Edward の義弟 Harold が Edward の遺言と当時の議会の承認を得て後継者となるが、Alfred 王以来の血統筋から離れていることを口実に Harold の即位に反対する Canute 系列のデーン人や Edward の母方の血縁関係にあるノルマン人を巻き込む王位争奪戦に発展する。Harold はノルウエー王 Harald とノルマンディ公 William 双方からの攻撃を受けることになり、Harald ノルウエー王との戦いの勝利を祝っている間隙に仕掛けられたノルマンディ公 William 軍の急襲を受けてその応戦中に Hasting で戦死する。

戦勝者 William の戴冠式が Westminster 寺院で 1066 年のクリスマスに行われ、こうしてイングランドは再度異民族による支配を受けることとなった。元来ノルマン人は Canute 同様デーン人の子孫で、2~3 世代前にスカンジナビアからフランスのノルマンディに南下して定住 (911 年) した Viking で、ノルマン人 'Norman' とは 'North-man' の略称であった。彼らは戦闘

と植民地形成で培った Viking のエネルギーを保持しながら、ノルマン定住後にはイタリア・ラテン文化とフランス語の洗礼を受けていた。そのようなノルマン貴族は、本能的に、当時のスカンジナビア祖国やイングランドのデーン人が失っていた卓越した政治的統率力と行政面での組織力を維持していた。ノルマンディ公 William のイングランド征服により、Canute 時代に築かれようとしていたイングランドと北欧との関係はこの後北海ではなく、ドーバ海峡を隔てるフランスとの関係に移行する。

ノルマンの支配が英語に与えた影響力はそれ以前のものとは比較できないほど大きい。ノルマンディからの征服者は政治・宮廷・宗教の為政行為を一変し、公用語としてフランス語とラテン語を使用するようになった。Harold の死後約 300 年間国王は英語を話さず、以前のアングロ・サクソン語は農民などの労働者階級の話し言葉として公の場から締め出されてしまった。書き言葉としては殆ど使用されなくなり学者の関心も薄れた英語は、3 世紀の期間を通して「性や語尾変化」のような複雑な文法要素を剥ぎ取り、語彙面での画期的な豊かさが加わって後代の Chaucer, Shakespeare, Milton の英語として復活する。

ノルマンの征服を境に英語は古代英語から中世英語に入るとされている。その特徴としては、文法上では、他のヨーロッパ言語にはない語尾屈折の弱体化と語順の固定化があり、また綴りの混乱とともに表音主義的性格が失われたことなども上げられる。しかし何よりも大きなことは、フランスの為政者によるフランス文化の導入によりフランス語とその祖語であるラテン語彙が大量に英語に流入したことであり、Anglo-Saxon 同質性の特徴を失ったと同時に国際語となる素地を形成したと言える。

5) 大航海時代と近代英語以降の語彙の拡大

ノルマン征服後のイングランドとフランスの関係、それに付随するイングランド国内での英語とフランス語の力関係は、いくつかの歴史的な重要事項〈①英仏 100 年戦争 (1337-1454) ②ペストによる人口の激減と労働者階級の復権 ③Chaucer の *Canterbury Tales* (英語で書かれた文学)〉を経過して変化していく。イングランド国内での英語の復権に続いてヨーロッパ世界でのイングランドの台頭が始まる。古代英語と中世英語を区分するノルマン征服ほど明確ではないが、初期近代英語を中世英語と区分する歴史的できごととして上げられるのは、1476 年の Caxton による印刷術の発明であり、1492 年のコロンブスによる新大陸の発見である。その約 100 年後の Elizabeth I 時代に、宗教改革によりイタリアから精神的に自立しスコットランドを統一したイギリスは、軍事大国フランス・スペインを凌駕してヨーロッパ世界での覇者として躍り出る。その後継者 James I と共に大航海時代に参入することになるイギリスの国語となった英語は、新世界の事物を表現する他民族の新しい言葉を自国語の中に更に消化・吸収

していく。ある統計によると 1500 年～1700 年の 10 年毎に 4,500 語の新語が英語として記録されていったと言われている。その 2/3 は既に存在していた接頭・接尾辞の付加や新しい組み合わせによって創造されたものであり、1/3 は他言語からの借用語であったとされている²⁾。

3. 語彙の拡大と語彙の連関〈ゲルマン祖語からラテン・フランス語源か〉

1) 英語の語源

現代英語を母国語とする国民は平均して 50,000 語程度の語彙を有していると言われている。そして OED (*Oxford English Dictionary*) に収録されている語彙数はその 10 倍の 500,000 語にのぼるといふ³⁾。語彙拡大の基は英語国民の歴史を通して獲得してきた異文化・異言語との接触・交流であり、具体的には他言語からの借用とそれぞれの言語が持っている形態素〈語以前の意味の最小単位〉の活用である。外国語としての英語学習者にとっては、膨大な語彙数の中からどのような語彙を何語習得するかが最大の関心事となるが、最も使用頻度の高い語彙の語源に関する研究①と②を下記に紹介する。共に頻度の高い 10,000 語を対象にしてその語源を調べたものであるが、②では頻度の高い 1000 語レベル毎の語源を調査している。そしてその 10,000 語は、一般人の個人書簡や商業文書に記録される語彙を大半とする現代使用されている 1500 万語以上の調査対象語の中から選定されている。

① *A Statistical Linguistic Analysis of American English*⁴⁾

Old English	French	Latin	Other Germanic	Other languages
31.8%	45%	16.7%	4.2%	2.3%

② *Origins of the English Language ; A social and Linguistic History*⁵⁾

Sources of the most frequent 10,000 words of English					
Decile	English	French	Latin	Norse	Other
1	83%	11%	2%	2%	2%
2	34	46	11	2	7
3	29	46	14	1	10
4	27	45	17	1	10
5	27	47	17	1	8

上記 2 つの研究から以下の 2 点が要約できる。

- (i) 英語語彙の語源としては一位がフランス・ラテン語で全体の 60% を占め、ゲルマン祖語は 2 位の 30% 程度である。
- (ii) 頻度別の統計結果②によると、最も使用頻度の高い 1000 語以内では一位はゲルマン祖語の 80% でラテン・フランス語源は 10% 強にすぎないが、2000～3000 語レベルではその順位は逆転し(i)の結果に近似する。

2) 語彙の連関

① 〈ゲルマン語派：英語－ドイツ語〉

Modern English	Old English 〈O〉 Prehistoric 〈P〉 Germanic 〈G〉	Indo-European Sanskrit 〈S〉	Modern Germanic German (G.) Dutch (Du.) Danish (Da.) Swedish (S.) Norwegian (N.)
become	bekweman 〈P〉		bekommen (G.) bekman (Du.)
begin	biginnan 〈P〉		beginnen (G.) börja (S.) begynne (N.) begynde (Da.)
blow	blawan 〈O〉-blo 〈P〉	-bhla / -bhlo	blasen / wehen (G.)
borrow	borgian 〈O〉 borg- 〈P〉	bhergh-	borgen (G.)
build	byldan 〈O〉 buthlam / bu-〈P〉		bauen (G.) bygga (S.) byffe (N. & Da.)
burn	birnan (boeman) 〈O〉 bren- (bran-) 〈P〉		brennen (G.) brinna (S.) brenne (N.) braende (Da.)
bring	bhrengk-〈P〉		bringen (G.) brengen (Du.) bringe (N.) mebringe (Da.)
buy	bycgan 〈O〉 bugjan 〈P〉		kaufen (G.) köpa (S.) kjøpe (N.) købe (Da.)
clean	klainoz 〈P〉		klein (G.)
climb	cklimban 〈P〉		steigen (G.) klättra (S.) klatre (N.)
come	kweman/kuman 〈P〉	gwem-	kommen (G.) komen (Du.) komma (S.) komme (N. & Da.)
deal	doel/daelan 〈O〉 dailiz 〈P〉		teilen (G.) deel (Du.)
do	don 〈P〉	-dhe	tun (G.) doen (Du.)
draw	dragan 〈O & P〉		tragen (G.) dragen (Du.) draga (S.)
drink	drengkan 〈P〉		trinken (G.) drinken (Du.) drinkke (Da.) dricka (S.)
drive	driban 〈P〉		treiben (G.) drijven (Du.) drive (Da.) driva (S.)
eat	etch 〈O〉 etan 〈P〉	ed-	essen (G.) eten (Du.) ota (S.)
end	andja 〈P〉	antjo	enden (G.) einde (Du.) anda (S.)
fall	feall 〈O〉 fallan 〈P〉		fallen (G.) falla (S.) falle (N.) falde (Da.) vallen (Du.)
feed	fedan 〈O〉 fothjan 〈P〉	pa- / pi-	füttern (G.)
feel		pol- / pal-	fühlen (G.) voelen (Du.)
fight	fekhtan 〈P〉		gechen (G.) vechten (Du.)
fill	fyllan 〈O〉 fullaz 〈P〉		füllen (G.) vullen (Du.) fylla (S.) fylde (Da.)
flow	flowan 〈O〉 flo 〈P〉	pleu	fließen (G.) flyde (Da.)
fly	fleugan 〈P〉	plue	fliegen (G.) flyga (S.) fly (N.) flyve (Da.) vliegen (Du.)
fold	falthan 〈P〉	pel-	folden (G.) fold (Da.) vouwen (Du.)
follow	flug 〈P〉		folgen (G.) folge (Da.) folja (S.) forfoge (N.) volgen (Du.)

Modern English	Old English ⟨O⟩ Prehistoric ⟨P⟩ Germanic ⟨G⟩	Indo-European Sanskrit ⟨S⟩	Modern Germanic German (G.) Dutch (Du.) Danish (Da.) Swedish (S.) Norwegian (N.)
forget	forgetan ⟨G⟩		vergessen (G.)
gather	gaderian ⟨O⟩ gath-⟨G⟩		sammeln (G.)
give	giefan ⟨O⟩ geban ⟨P⟩	gla(le)bh-	geben (G.) geven (Du.) give (Da.) giva (S.) gi (N.)
go	eode ⟨O⟩	ghei- / ghe-	gehen (G.) gaan (Du.) gå (S. N. & Da.)
grow	gro-⟨P⟩		groeien (Du.)
hate	klatis	kades	hassen (G.) haat (Du.) hat (S.) had (Da.)
have	khaben	kap	haben (G.) hebben (Du.) have (Da.) ha (S. & N.)
hear	khauzjan ⟨P⟩		hören (G.) hooren (Du.) høre (Da.) höra (S.) hore (N.)
help	khelp-⟨G⟩	kelp-	helfen (G.) helpen (Du.) hjapla (S.) hjaelpe (Da. & Da.)
hunt	hentan ⟨O⟩	kend	hinna (S.) 'reach'
know	can /ken	gn-	kennen (G.) kennen (Du.) kanna (S.) kende (Da.)
last	laistjan ⟨P⟩	leis-	letzt (G.) laatst (Du.)
laugh	khlahk ⟨G⟩	klak / klok	lachen (G. & Du.) le (S., N., & Da.)
lead	laithjan ⟨P⟩		leiten (G.) leiden (Du.) leda (S.) lede (Da.)
learn	liznojan ⟨P⟩	leis-	lernen (G.) leeren (Du.) lora (S.) laere (Da.)
leave	Leaf ⟨O⟩ laibjan ⟨P⟩	leubh-	bleiben (G.)
let	Laetan ⟨O⟩ laet ⟨P⟩	le-	lassen (G.) laten (Du.) låta (S.)
lie	leg / lag ⟨P⟩	leg / logh	liegen (G.) liggen (Du.) ligga (S.) ligge (Da.) legge (N.)
like	likojan ⟨O⟩ likam ⟨P⟩		gern haben (G.) like (N.)
listen	list ⟨O⟩ khlustiz ⟨P⟩	klu-	zuhören (G.)
live	libban/ lifian ⟨O⟩ lib ⟨P⟩		leben (G.) leve (N.)
look	lokojan ⟨P⟩		lügen (G.) 'show'
lose	losian ⟨O⟩	lau/ leu,lu-	verlieren (G.)
love	lief ⟨O⟩	leubh-	lieben (G.) liefde (Du.) älska (S.) elske (N.)
make	makojan ⟨G⟩ mako-⟨P⟩	mag-	machen (G.) maken (Du.)
mark	marko ⟨P⟩		markieren (G.)
meet	gamotjan ⟨P⟩		moeten (Du.) möta (S.) møde (Da.) møte (N.)
mind	gemynd ⟨O⟩ gamunthiz ⟨P⟩	men ('think')	
miss	missjan ⟨P⟩		missen (G. & Du.) mista (S.) miste (Da. & N.)
need	nauthi ⟨P⟩		not (G.) nood (Du.) nod (Da.) nod (S.)

Modern English	Old English ⟨O⟩ Prehistoric ⟨P⟩ Germanic ⟨G⟩	Indo-European Sanskrit ⟨S⟩	Modern Germanic German (G.) Dutch (Du.) Danish (Da.) Swedish (S.) Norwegian (N.)
open	upanaz ⟨P⟩		öppna (S.) åpen (N.) åbne (Da.) aufmachen (G.)
reach	raikjan ⟨P⟩		reichen (G.) reiken (Du.)
run	rinnan ⟨O⟩	moti ⟨S⟩	rennen (G.) ranna (S.)
sail	seglam ⟨P⟩	seklom	segeln (G. & S.) zeil (Du.) sejl (Da.)
say	sagian ⟨G⟩	seq-	sagen (G.) zeggen (Du.) saga (S.) sige (Da.)
see	sekhwan ⟨P⟩	seq-	sehen (G.) zien (Du.) se (S. & Da.)
sell	saljan ⟨P⟩		salga (S.) soelge (Du.) selge (N.) sælge (Da.)
send	santhjan ⟨P⟩ ‘go’		senden (G.) zenden (D.) sende (Da. & N.) sonda (S.)
set	satjan ⟨P⟩		setzen (G.) zetten (Du.) satta (S.) soette (Da.)
shake	skakan ⟨P⟩	skeg / skek	schütteln (G.) skaka (S.) skage (N.)
shine	skinan ⟨P⟩		scheinen (G.) skinne (Da.) schijnen (Du.) skina (S.)
shoot	skeut ⟨P⟩		schießen (G.) schieten (Du.) skjuta (S.) skyde (Da.)
show	skauwojan ⟨P⟩	sjay	schauen (G.)
sit	sitjan/ setjan ⟨P⟩	sed-	sitzen (G.) zitten (Du.) sitta (S.) siddle (Da.)
sleep	slaepan ⟨P⟩		schlafen (G.) spapen (Du.) sova (S.) sove (N. & Da.)
snow	snaiwaz ⟨P⟩	snigwh	Schnee (G.) sne (Da.) sno (S.) sheeuw (Du.) 〈名詞形〉
speak	sprecān ⟨O⟩	sphurj-⟨S⟩	sprechen (G.) spreken (Du.) snake (N.) prata (S.)
stand	standan ⟨G⟩	sta-	stehen (G.) stā (S., N. & Da.)
starve		star- / ster-	sterben (G.) sterven (Du.)
stick	sti (e, a)k- ⟨P⟩	stig- / steig-	stechen (G.) ‘pierce’
stop	stoppian ⟨O⟩ stoppon ⟨P⟩		stanna (S.) stoppe (N.) standse (Da.) aufhoren (G.)
stretch	strakkjan ⟨P⟩		stricken (G.) strekken (Du.)
swim	swemjan ⟨P⟩		schwimmen (G.) simma (S.) zwemmen (Du.) svømme (Da. & N.)
teach	taikjan ⟨O⟩	deik- ‘show’	zeigen (G.) lara (S.) laere (N.)
tell	taljan ⟨P⟩	tal-	zählen (G.) ‘count’
thank	thank-⟨P⟩		danken (G.) tacka (S.) takke (N. & Da.)
think	thengk ⟨P⟩		denken (G.) tänka (S.) tenke (N.) tænke (Da.)
throw	thrawan / threjan ⟨P⟩	ter-	drehen (G.) ‘turn’ kasta (S.) kaste (N. & Da.)
warm	warmaz ⟨P⟩	ghwerm-/ ghworm-	warm (G. & Du.) varm (S. & Da.)
wash	waskan ⟨P⟩	wat-	waschen (G.) vasschen (Du.) vaska (S.) vaske (N.) vann (Da.)

Modern English	Old English ⟨O⟩ Prehistoric ⟨P⟩ Germanic ⟨G⟩	Indo-European Sanskrit ⟨S⟩	Modern Germanic German (G.) Dutch (Du.) Danish (Da.) Swedish (S.) Norwegian (N.)
water		wodor	wasser (G.) water (Du.) vand (Da.) vattren (S.)
win		van	gewinnen (G.) vinna (S.) vinde (Da.) venne (N.)
work	werkam ⟨P⟩	werg- / worg-	Werk (G. & Du.) verk (S.) ⟨名詞形⟩ arbeide (N.) arbejde (Da.)

② スカンジナヴィア語源

Modern English	Old Norse Old English ⟨O⟩	Indo-European Prehistoric Germanic ⟨P⟩ Sanskrit ⟨S⟩	Modern Germanic Swedish (S.) Norwegian (N.) Danish (D.) German (G.) Dutch (D.)
call	kalla	gol kal ⟨P⟩	Kalla (S.) kalle (N.) kalde (Da.) rufen (G.)
die	deyja	djeu	dö (S.) dø (N. & Da.) starben (G.)
dream	draumr	druh- ⟨S⟩	drömma (S.) drømme (N. & Da.) traum (G.) droom (Du.)
drop (droop)	drupa dropa ⟨O⟩	dhreub- drup- ⟨P⟩	drope (Da.) fallen (G.) falla (S.) falle (N.)
happen	happ ‘luck’		
hit	hitta		hitta (S. ‘find’) slå (Da., N. & S.) schlagen (G.)
keep	kopa ‘stare’		halten (G.)
lift (loft)	lopt	luftjan / -luftuz ‘air!’	lyfta (S.) luft (N.) løfte (Da.) heben (G.)
rain	rakr ‘wet’	reg- ⟨P⟩	regen (G. & Du.) regn (Da. & S.)
raise	reisa	raizjan	
seem	soema ‘suitable’	som- ⟨P⟩	
shout	skuta	skeut- / skaut- skaut- ⟨P⟩	strika (S.) strike (N.) råbe (Da.)
smile	smearcian ⟨O⟩	smei- smeras ⟨S⟩	smila (S.) smile (Da.) smil (N.) lächeln (G.)
want	vanta ‘lack’	wa- (‘lacking’) wanaton ⟨P⟩	vill (S.) ville (N. & Da.) wollen (G.)
weaken (weak)	veikr	wikwaz ⟨P⟩	weich (G.) week (Du.) svak (N.) svag (S. & Da.) schwächen (G.)

③ 〈ラテン語派：英語——フランス語〉

Modern English	Old French Anglo Norman 〈A. N.〉	Latin	Modern French
〈11 世紀 - 12 世紀〉			
pay	payer	pacare	payer
prove	prover	probus (good)	prouver
〈13 世紀〉			
appear	apareir	apparere	apparaître
arrive	ariver	ripa (river bank)	arriver
catch	chacier	capere	chacier/cachier
change	changier	cambire	changer
charm	charme	carmen (song)	charmer
clear	cler	clarus	s'claircir
close	sclos	clavus (nail)	clôturer
contain	contenir	continere	contenir
cost	coster	constare	coûter
cover	cuvrir	cooperire	couvrir
cry	crier	quiritare	crier
cure	cure	cura (care)	guérir curer
defend	defendre	defendere	défendre
delay	declair	laxare	délai (名詞)
deliver	delivrer	deliberare	délivrer
diverse · divorce	divertir	divertere	divorcer
destroy	destruire	destrugere	détruire
enter	entrer	intrare	entrer
fail	faillir	fallere	faillir
force	force	fortis	forcer
form	forme	forma	former
govern	governer	gubernare	gouverner
join	joindre	jungere jug-〈Indo-European〉	joindre
judge	juger	judex	juger
marry	marrier	marius (husband)	se marier
measure	mesure	metiri	mesurer
move	mover 〈A. N.〉	movere	émouvoir
order	ordre	ordo (row, line)	ordonner
paint	peindre	pingere	peindre
pass	passer	passare	passer
present	present	prassens	présenter
print	preindre	premere	imprimer
push	pusser 〈A. N.〉	pellere	pousser

Modern English	Old French Anglo Norman 〈A. N.〉 Old Irish 〈O. I.〉	Latin	Modern French
receive	receivre	recipere (regain)	recevoir
roll	rolle	rotulus (small wheel)	rouler
save	sauver 〈A. N.〉	salvare	sauver
sign	signe	signare ('mark', p.p.)	signer
state	estat	status (position)	etat (名詞)
study	estudie	studium	étudier
taste	taster	tastare	tâter
tax	taxer	taxare	taxer
touch	tochier	toccare	toucher
treat	treter 〈A. N.〉	tractare	traiter
use	user	usare	utiliser
〈14 世紀〉			
act	acte	agere	agir
agree	agreer	gratum	accorder
allow	alouer	allandare	allouer
apply (ply)	plier (bend)	plicare (fold)	appliquer
approve	aprover	approbare	approuver
avoid	avider 〈A. N.〉	vocitus (vacant)	éviter
calm	calma 〈O. I.〉	cauma (heat)	calmer
check	eschequier	scaccus	chèque (名詞)
complain	complaindre	plangere	se plaindre
complete	complet	completus	compléter
consider	considerer	considerare	considérer
contain	contenir	continere	contenir
continue	continner	continere	continuer
count	conter	computare	compter
decide	decider	decidere	décider
decrease	desreister	discreocere	diminuer
destroy	destruire	destrugere	détruire
determine	determiner	determinare	déterminer
disappear (appear)	apareir	apparere	disparaître
escape	escaper	excappare	échapper
excite	excite	excitare	exciter
finish	feniss	finire	finir
inform	enfourmer	informere	informer
offer	offrir	offerre	offrir
prefer	preferer	praeferre	préférer
press	presser	pressare	presser

Modern English	Old French Anglo Norman 〈A. N.〉	Latin	Modern French
process	proces	procedere	processus (名詞)
quarrel	querele	querela	se quereller
remember	revenir	rememorari	se rappeler se souvenir
reply	replier	replicare	repondre
search	searcher 〈A. N.〉	circare (go round)	recherche
travel	travailler	trepaliare	voyager
〈15世紀 - 17世紀〉			
admit	amette	admittere mittere (send)	admettre
collect	collecter	collectare	collectionner
compare	comparer	comparare	comparer
control	contreroller 〈A. N.〉	contrarotulare	contrôler
depend	dependre	dependere	dépendre
describe	descrivre	describere	décrire
employ	emplier	implicare	employer
include	enclore	includere	inclure
indicate	enditer 〈A. N.〉 enditier	indicare	indiquer
interest	interesse	interesse	intéresser
invite	inviter	invitare	inviter
notice・notify	notice	noscere	notifier
pick	picquer	piccare	choisir・cueillir
plan	planter	plantare (plant)	plan (名詞) projeter
pose	poser	ponere (put)	poser
practise	practiser	practizare	pratiquer
prepare	preparer	praeparare	préparer
realize (real)	real 〈A. N.〉	res (thing)	réaliser
stay	estai (‘stop’)	stare (stand)	rester
succeed	succeder	succedere	succéder

(図表の中で、現代語以外の語に付随する発音関連の記号は省略している。)

付記

上記「語彙の連関」表の動詞は大阪観光大学が2008年10月に発行した『状況別 観光英語の語彙・用例集』に収録した、中学レベルの基本動詞レベル1(約300語)と、その他日常生活で使用頻度の高いレベル2(約100語)の中から抜粋している。〈ゲルマン祖語からラテン・フランス語源か〉の観点からいくと、レベル1の動詞ではその割合は半ば(ゲルマン祖語がわずかに強)しており、レベル2の段階では大半がラテン・フランス語源でゲルマン祖語は数える程度に減少する。

注

- 1) Robert McCrum, William Cran, & Robert MacNeil, *BBC : The Story of English*, P.p.9-10.
‘William Jones (philologist)’, Wikipedia, the free encyclopedia, P.p.1-2
- 2) Donka Minkova and Robert Stockwell, *English Words ; History and Structure* (Second Edition), p.47.
- 3) John Ayto, *Word Origins* (Second Edition), Introduction.
- 4) (The Hague : Mouton, 1965), p.36, quoted in *Word Origins*, Ibid., p.57.
- 5) (New York : The Free Press, 1975), p.67, quoted in *Word Origins*, Ibid., p.60.

参考文献

- ・ Ayto, John, *Word Origins* (Second Edition), A & C Black, 2005.
- ・ Reader's Digest, *The Origins of Words & Phrases*, The Reader's Digest Association Limited, 2007.
- ・ Leith, Dick, *A Social History of English*, Routledge & Kegan Paul, London, 1983.
- ・ Minkova, Donka and Stockwell, Robert, *English Words ; History and Structure* (Second Edition), Cambridge University Press, 2009.
- ・ McCrum, Robert, Cran, William & MacNeil, Robert, *BBC : The Story of English*, The Eihosha Ltd., 1986.
- ・ Pyles, Thomas & Algeo, John, *The Origins and Development of the English Language* (Fourth Edition), Harcourt Brace College Publishers, 1993.
- ・ Trevelyan, G. M., *A Shortened History of England*, Penguin Books, 1987.
- ・ 岡戸紀美代 (著) 『旅の指さし会話帳㉔スウェーデン』 情報センター出版局 2008 年.
- ・ 鈴木雅子 (著) 『旅の指さし会話帳㉕デンマーク』 情報センター出版局 2008 年.
- ・ 若林博子 (著) 『旅の指さし会話帳㉖ノルウエー』 情報センター出版局 2004 年.
- ・ 渡辺学 (監修) 三省堂編集所 (編) 『日独英辞典』 三省堂 2004 年.
- ・ 『状況別 観光英語の語彙・用例集』 大阪観光大学 2008 年.